

多良崎城跡

—中世の代表的な城館跡—



◆ 城跡の位置

多良崎城跡は、常磐線佐和駅の東方約 1.8 km の大字足崎字館に位置し、勝田ゴルフ倶楽部西側の半島状の台地上に存在しています。現在では、新川流域低地の水田を見下ろす台地上に位置していますが、周辺の水田地帯は、もとは真崎浦と呼ばれた沼地でした。北、東、西側の三方が沼地(深田)に囲まれた断崖の上に築かれ、南側は狭い尾根に続いており、天然の要害の地で城館跡として適した立地でありました。

この真崎浦に突き出た一番大きな崎であったので、太郎崎→多良崎と呼ばれたと考えられています。現在は「足崎」と書きますが、鎌倉時代の史料には「多良崎」と書かれています。

◆ 城跡の構造

昭和 48(1973)年に実測調査が行われ、本郭・二の郭・三の郭などの遺構が、ほぼ完全な姿で残っていることが確認されています。これらの遺構は敵の侵入を防ぎ、攻めにくいように自然の地形を巧みに利用して築かれています。本郭の南側に通ずる狭い尾根には、木戸跡とみられる土塁が残っており、もっとも高い位置に本郭が築かれています。標高約 30m の尾根の頂上を平坦にし、一辺約 55m、高さ 2.5m の土塁を方形に廻らせています。本郭の東側の土塁中央部に虎口(大手口)が設けられ、南と西の角にはテラス状に張り出した隅櫓跡が認められます。南側の東西の土塁に沿った平坦部に屋形が築かれていたと推定され、付近から貯水用に用いられた常滑焼大甕の破片が出土しています。

二の郭は本郭の北側に位置し、50m前後の3本の土塁に囲まれ、三角形を呈しています。本郭よりやや低く、二の郭と三の郭の間には大きな空堀があり、幅2mの堀底道が残っています。三の郭は本郭・二の郭よりさらに低く、標高約24mの平坦地が台地の突端まで続いています。

台地を横切る空堀・土塁や突端の西寄りに直径15m、高さ約2mの円形状の物見櫓か烽火台と考えられる遺構が残っています。

◆ 城跡の性格・特徴

源頼朝が鎌倉幕府を開いた鎌倉時代初期に、常陸大掾氏(平氏)一族の吉田里幹(多良崎三郎)が、多良崎郷の地頭としてこの地に土着し、多良崎城跡より約700m南側の奥山の地に館を築いたと考えられています。奥山館跡は、北根の入り組んだ谷津の突端部にあり、一辺55m前後の方形単郭の土塁をめぐらしています。その後、鎌倉時代末期から南北朝時代頃に、幕府の統制力が弱まり治安が乱れると、吉田里幹の後裔の多良崎氏は防備上条件の良いこの要害の地に城郭を築いたと考えられています。この城は地形や構造からみると、非常時の際の山城として利用されたと推定されています。

なお、南北朝の動乱で南朝方についての常陸大掾氏系は没落してしまい、多良崎郷の地頭が藤原秀郷の後裔である那珂氏系の足立氏に交代したようです。足立氏については、南北朝の騒乱が記録された「太平記」に、足利尊氏こうのもろやすの重臣である高師泰の軍に加わって活躍したことが書かれています。

市内には中世に築かれた城館跡が数多く残っていますが、多良崎城跡は特に残存状態がよく、当時の築城様式を知るうえで重要な城館跡であるため、昭和50(1975)年に市の史跡指定を受けています。また、昭和61(1986)年には、「茨城県緑地環境保全地域」にも指定されています。